文化・経済フォーラム滋賀　提　言　＜概要版＞

令和 3 年（2021 年）2 月 13 日

アートを地域のプラットフォームに -文化と経済の連携を深める新しい視点の探究-

■ はじめに

新型コロナウイルス感染症の脅威によって日常が変化しはじめた。行動が制限され、人類の非力さを痛感するこの現状を果たして誰が予測できただろうか。このような中、びわ湖ホールでは昨年 3 月にオペラ「神々の黄昏」を無観客で上演し、YouTube で無料配信することで、世界 30 ヵ国 41 万人が視聴した。この活動が評価され、びわ湖ホールは「第 68 回菊池寛賞」を受賞。今年 6 月 27 日には、長期休館していた滋賀県立近代美術館がリニューアルオープンする。コロナ禍において、これから文化と経済の連携をどのように深め、未来を創るのか、文化・経済フォーラム滋賀の 2019 年～2020 年の活動を総括しつつ、以下の提言を行う。

■ アートについて

今回コロナ禍に直面し、アートは特別なものではなく、水や空気と同じように、日常になくてはならない生きるために必要なものだと多くの人が気付いたのではないか。アートは芸術性だけではなく、生きるための教育性を含む「人間力、文化力」を育むものであり、あらゆる領域との連携を促す媒介役として、また、新しいビジネス展開を生み出すツールやメディアとして、その理解をさらに深められたらと考える。

■提言『アートを地域のプラットフォームに』

感受性を育む芸術教育から得る「人間力、文化力」は、接着剤のようなものである。芸術教育は、教育課程において特化するようなものではないが、芸術（アート）体験を通して目で見たこと、考えたこと、心を込めてつくり上げる日常と非日常、素材と人、時間と空間等をつなぎ合わせる創造力を養う。良い素養のあるものが財産を築くように、この接着剤の使い方によっては、想像を超えたものを導き出すこともある。人々が地域社会の課題に向き合うとき、文化と経済の本質を理解し、それぞれのバランスを取りながら行動することが重要ではないか。

昨年 10 月 18 日に開催した『文化で滋賀を元気に！シンポジウム』では、近江商人の経営理念「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」から、現在の「新・三方よし」を見出そうとした。長期的な展望で社会全体の幸せを願う「三方よし」の姿勢は、これからも滋賀の文化と経済の関係を支える力となる。

2019 年 9 月 4 日に開催した『文化経済サロン』で講演いただいた山口周氏は「経営における意思決定のクオリティは、アート、サイエンス、クラフトの三つの要素のバランスによって大きく変わる」と述べた。滋賀の文化と経済を今後さらに連携させるには「サイエンス（理論）」と「クラフト（技術）」だけでなく、同じステージに「アート（感覚）」が加わったプラットフォーム（物事を動かすための土台となる環境）が機能し、教育、医療福祉、郷土歴史、自然環境、観光産業など様々な分野とつなげる滋賀の新しい姿を構築すること。これにより、古き良き文化を織り交ぜた新しい価値観を生み出すことを期待したい。

前述の『文化で滋賀を元気に！シンポジウム』で講演いただいた NPO 法人グリーンバレーの大南信也氏が述べたように、いつでも問題はやはり人が解決していくものであるから、「人間力、文化力」を育てるアートが地域のプラットフォームとして力を発揮できるよう、文化と経済が連携する環境づくりを進めていきたい。